

Title	カタカナ表記語の意味についての一考察：身体性とイメージの観点から
Author(s)	奥垣内, 健
Citation	言語科学論集 = Papers in linguistic science (2010), 16: 79-92
Issue Date	2010-12
URL	https://doi.org/10.14989/141357
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

カタカナ表記語の意味についての一考察

—身体性とイメージの観点から—

奥垣内 健

京都大学大学院

qtypr057@yahoo.co.jp

1. はじめに

本稿では日本語における語の漢字・仮名表記¹の違いと意味の違いについて、身体性とイメージの観点から認知言語学のアプローチにもとづいて考察する。考察にあたっては「葉／クスリ」や「携帯／ケータイ」のように1つの音に対して漢字表記と特にカタカナ表記が使用される語を対象とする。

日本語は漢字、ひらがな、カタカナという3つの表記体系を同時に使用する言語である。そのため、日本語で語を表記する際には漢字表記、ひらがな、カタカナ表記という3つの選択肢があることになる。この時、ある語の漢字表記と仮名表記の揺れに積極的な意味の差は認められないとし、慣習性²による書き分けや漢字が書けない場合に臨時的に使用される表記としてのみ仮名文字を捉えることも不可能ではない。

しかし、漢字表記と仮名表記の書き分けには、単なる慣習性によるものではなく、例えば「携帯」と「ケータイ」のように意味の違いが関係していると思われる事例がある。また、現在のワープロソフトや携帯電話での漢字変換を考えた場合、漢字表記が正確に分からない語でも候補から選択するという方法で変換は十分に可能である。そのため、慣習性や漢字がわからないという理由だけでは語が仮名表記される説明としては不十分³であると考えられる。この点に関しては、比較的漢字表記が容易な「走る」や「受ける」に対し「ハシる」や「ウケる」というカタカナ表記が使われる場合があることも注目される。これらの現象を捉えるには、文字表記による意味の違いに注目する必要がある。

さらに、本稿において漢字表記と仮名表記⁴による意味の差を積極的に認める根拠として以下の2点が挙げられる。

- (1) 仮名文字は音のみを持つ表音文字であるため、表語文字である漢字と比べて表記自体の持つ意味が希薄であるといえる⁵。そのため、漢字で表記する場合に比べ、拡張的な意味での使用が可能になることが考えられる。別の言い方をすれば、仮名

表記の意味の希薄さが、ある語の漢字表記と仮名表記の意味の乖離を動機付けている可能性がある。

- (2) ある語の漢字表記と仮名表記の間で意味の乖離があり、それらが並列して使用されている場合、その語の漢字表記に対する仮名表記を一種の同音異義語（仮名表記語）⁶とする方が、一つの漢字表記語に多義性を持たせるよりも記述が煩雑にならず、かつ使用の実態に即している。

さらに、これらの点に関連して、漢字表記と仮名表記の見た目の違いに着目し、「ヒトの身体性とイメージ」の観点から認知言語学のアプローチにもとづきカタカナ表記語を考察することで、先行研究よりも自然かつ実態に即した形での説明ができると考える。それは以下の点である。

- (3) 漢字表記と仮名表記では全体的な形や線の数、その密集の程度などにかかなりの違いがある。身体を持ったヒトが視覚によってこの違いを捉え、認識することによって見え方の違いが生まれる。見え方の違いが喚起されるイメージの違いに結びつき、その違いが意味の違いを動機づけているという認知言語学の観点に立つことで漢字表記語と仮名表記語の意味の違いを実際の言語事例に即した形で捉えられる。

本稿では以上3点をもとに、ある語の漢字表記と仮名表記、特にカタカナ表記で意味の違いがあると考えられる語について考察する。

各節の内容は以下のとおりである。初めに2節で関連する先行研究として主に成田・榊原（2004）と則松・堀尾（2006）を挙げ、問題点を指摘する。3節で文字表記のイメージを定義し、文字表記に関する岩崎・八田（2004）の先行研究をもとにカタカナ表記のイメージを具体化する。そして2節での問題点を解決するためのアプローチを論じる。4節でカタカナ表記のイメージから言語事例を分析、考察し、カタカナ表記語が表記のイメージと表記の性質に動機づけられた独自の意味を持つ語であることを主張する。最後に5節でまとめと展望を述べる。

2. 先行研究の検討

ここでカタカナ表記語に関連した先行研究とその問題点を挙げる。

成田・榊原（2004）は表記戦略の観点から、カタカナの機能に「ひらがなの表記列から

視覚的に独立して漢字と同様に『ひとつの観念語であることを示す』と「漢字やひらがなで表記されないことによって『普通の意味用法とは違うことを示す』」(成田・榊原 2004: 53)の2点を挙げている。この研究はカタカナ表記語を漢字表記語の異表記や多義ではなく、独自の意味を持つ語と捉えたものといえる。しかしながら、成田・榊原の研究では、個々のカタカナ表記語の意味やその傾向についての考察が必ずしも十分であるとは言えない面が残される。また「ニッサン」「トヨタ」などの企業名にカタカナ表記が使用されることを挙げ、これをカタカナのイメージの良さにもとづくとしているが、カタカナ表記を使用する動機付けはイメージの良さだけとは限らない。

則松・堀尾(2006)も成田・榊原と同様に、若者言葉におけるカタカナ表記語を「一般的な意味・用法と若者特有の使用法との差別化を計ろうとする」(則松・堀尾 2006: 30)ものであるとしている。則松・堀尾は雑誌から収集した事例を多数挙げて分類し、常用漢字をカタカナ表記したカタカナ表記語が、性質や状態などの属性を表す語や、感覚や心理を表す語に出やすいと指摘した上で、これを若者特有の意識の反映であるとしている。これもカタカナ表記語に独自の意味を認めるものであり、意味分類の観点からの鋭い指摘であるといえる。しかしながら、則松・堀尾の研究も個々のカタカナ表記語がどのような意味を持つかという点については、詳細な意味の記述が十分になされているとは言い難い。また、カタカナを用いる動機付けが差別化を図ることだけであれば、なぜアルファベットやひらがなではないのかという点が説明できず、動機付けとしては不十分である。

これらの問題点を解決し、カタカナ表記語の意味と傾向、使用の動機付けを捉えるには表記の持つ具体的なイメージと仮名表記の性質に注目する必要があると考えられる。このことは3.5節で改めて主張する。

3. イメージと漢字・仮名表記

本節では「文字表記のイメージ」を定義し、カタカナ表記が持つイメージを具体化する⁷。そして認知言語学におけるイメージと意味の関係を述べる。さらに漢字と仮名文字の性質を概観し、最後にカタカナ表記語に対する本稿のアプローチを述べる。

3.1. 文字表記のイメージの定義

文字表記のイメージが意味に関連していると主張するにあたり、「文字表記のイメージ」を定義する。まずイメージという語の辞書的な定義を確認すると、

- i) 心のなかに思い浮かべる姿・像。感覚像・心象(岩波国語辞典)
- ii) 1. 心の中に浮かべる像。全体的な印象。心象。

2. 姿。形象。映像。(広辞苑)

- iii) 心に思い浮かべる像や情景。ある物事についていただく全体的な感じ。また、心の中に思い描くこと (goo 辞書)

とある。

これらの記述から、イメージとは視覚的要素や視覚的記憶⁸を示す語であるといえる。つまり、モノやコトの視覚的側面を表すものである。さらに「感覚像・全体的な感じ」という記述からは、イメージはあるモノに関する主観的な評価や関連した知識をも表すといえる。以上から、イメージという語はあるモノの視覚的側面に加え、そのモノが喚起する主観的な評価や知識を表すといえる。

以上を背景として、本稿では「文字表記のイメージ」を「文字の形」という視覚的要素と文字表記が喚起する広範な知識と定義する⁹。

3.2. カタカナ表記のイメージ

本節では 3.1 節での定義にもとづき、カタカナ表記のイメージを具体的に記述する。初めにカタカナ表記の特徴を確認する。ここで注目されるのは、文字表記に関して岩原・八田 (2004) がカタカナの感情的意味¹⁰に「外国」「冷たい」「気取った」を挙げ、さらにカタカナ表記を「モダン・おしゃれ」な印象を持つ表記としていることである。これはカタカナ表記自体が一定の知識を喚起する可能性を示唆する。感情的意味の「外国」は新規の外来語の表記に使用されることに起因すると考えられる。また、視覚的要素についてはカタカナの起源は「漢字の一部を取って作ったもの」(広辞苑)であり、漢字の画の一部を利用したものであることから、デザインが鋭角的でシンプルであることが挙げられる。この点に関して、ひらがなは「漢字の草体から作られた草(そう)の仮名をさらにくずして作った音節文字」(広辞苑)であることから曲線が多く、柔らかい字体という違いがあるといえる。

これらの特徴は 3.1 節でのイメージの定義から、カタカナ表記のイメージとして捉えることができる。すなわち、カタカナ表記のイメージは「外国・冷たい・気取った・モダン・おしゃれ・鋭角的」という要素で構成されるものといえる。

3.3. 漢字表記と仮名表記の性質

3.2 節で規定したカタカナ表記のイメージに加え、本節では漢字と仮名文字の性質の違いを確認する。例えば「鶏」という漢字はその文字を知らない場合であっても「鳥」という部首から鳥の一種類であると推測することができる。これは漢字表記自体がある程度の意味を持つということである。一方、仮名文字は表音文字であるために漢字と比べて意味が

希薄であると考えられる。例えば「こうえん/コウエン」という表記のみから、意味を「公園・講演・公演」のどれかに決定することは不可能である。

これらの性質は、漢字は意味と音を持つ表語文字¹¹で、仮名文字は音を持つ表音文字であると一般的にいわれているものである¹²。

つまり、上記の「意味が希薄」という仮名表記の性質により、語の表記に仮名表記を使用する場合には漢字表記のような意味の読み込みが起こらず、拡張的な意味での使用が可能になると考えられる。

3.4. 認知言語学におけるイメージの意味

認知言語学においては「言語能力は、生物の延長としての人間の身体性を反映する一般的な認知能力によって動機づけられ、この認知能力からの発現の一形態として位置づけられる」(山梨 2000: 267) とあるように、ヒトの言語に現れる様々な側面の基盤をヒトの身体性とそれを反映する認知能力に求める。この認知言語学の観点から見れば、視覚にもとづく文字の見え方の違いとイメージの違いは意味の違いとして言葉に反映されるものといえる。

具体的には、漢字表記と仮名表記が異なる形態をしていることは見え方の違いを生じさせる原因であり、異なる見え方が異なるイメージを喚起することで意味の差が生じると考えられる。すなわち、認知言語学の観点からは、漢字と仮名文字という表記の形態の違い自体がそれぞれの意味の違いを表しているといえる。また、ヒトにとっての見え方とイメージから言葉の意味を考えることは、ヒトの認識をもとに言葉の意味を考えることである。その利点として、表記自体を言語表現の意味の一部として扱うことができることに加えて、ヒトの認識にそった形で言葉の意味を記述できる点が挙げられる。

3.5. 文字表記に対する本研究のアプローチ

カタカナ表記語を含めた仮名表記語については、慣習性による書き分けや漢字表記がわからない場合での臨時の表記として用いられている可能性を考えることもできる。しかし、ヒトは慣習に従うだけの動物ではなく、慣習性のみでヒトの言語使用の実態を捉えられるとは限らない。また、前述のように、現在のワープロソフトや携帯電話での漢字変換を考えた場合、表記が正確に分からない語彙であったとしても候補から選択するという方法で変換は可能であり、漢字がわからないという理由では、語が仮名表記される説明として不十分である。

この点に関連した言語に関わる視覚的要素の研究に岡本(2008)があり、ビジュアル・グラマー¹³の観点から新聞記事を対象に、イラストや文字のフォント、配置などによる意味

創出の分析がされている。その中で、岡本は表記をあえて変更する表現方法を特に「文字シフト」と呼んでいる。この「文字シフト」によって新たに意味を創り出す手法は、本稿における漢字表記語に対するカタカナ表記語にも当てはまると考えられる。また、このことは言語表現における表記という要素が表現と意味に対するヒトの認識に関わる要素であることを示すものといえる。

よって、言語使用の実態に則した記述のためには、表記による意味の違いに注目する必要があると考えられる。3.3節で挙げた「仮名表記の意味の希薄さにもとづいた拡張的な使用」は、カタカナ表記語を独自の意味を持つ語とする根拠の1つといえる。しかしながら「意味が希薄なために解釈が自由」というだけであれば特定の意味で用いられることもなく、カタカナ表記語に対する意味の定着もないように思われる。ところが、実際の用例ではカタカナ表記語には意味の定着があり、さらに意味に特定の傾向があると考えられるものも多い。そのため、意味解釈の広がりに加えて、他の要因がカタカナ表記語には作用していると考えるのが妥当である。本稿では認知言語学の観点から、それを3.2節のカタカナ表記のイメージであるとする。

まとめると、本研究では①漢字表記からの意味の乖離、②仮名表記の意味の希薄さ、③文字表記のイメージという3つの観点からカタカナ表記語に関わる現象にアプローチする。これにより2節で挙げた問題点を解決することが可能である。

4. カタカナ表記語の意味

本節では、実際にカタカナ表記語が独自の意味を持つと考えられる事例を取り上げ、分析、考察する。

4.1. カタカナ表記独自の意味とその実例

4.1.1. 考察に際しての前提

本研究で取り挙げるカタカナ表記語に関する事例として、「外套／コート」や「単車／バイク」のように日本語と外来語では表記する場合に音が異なるものがある。これらの事例については今回の考察の対象から外している。なぜなら本稿では音が同じという条件の下で漢字表記と仮名表記、特にカタカナ表記で表記が揺れるものを考察の対象としているためである。

4.1.2. 「走る／ハシる」

まず「走る／ハシる」という動詞の意味の違いを確認する。この2つの表記のそれぞれの

意味と違いについて Web からの用例をもとに示す。

- (4) a. 寒さや強風の中ガタガタ震えながら**走る**大会だったけど（走ることは考えること 個人ブログ）
- b. ドラマーは演奏中に**ハシる**タイプの人とモタるタイプの人がいるとはよく聞きますが（キャスフィ学生コミュニティ ドラム掲示板）

筆者の判断でも (4b) は「走る」よりも「ハシる」と書くほうが適切である。「ハシる」というカタカナ表記語の動詞は、Web 上の辞書に「音楽用語で本来のリズム・テンポからはずれて速く演奏する状態を指す」(weblilo 辞書) という意味で記述されており、その使用が音楽に限定されている。一方「走る」という漢字表記語では、(4a) のように動作主が実際に運動している場合を表す。そのため、(4b) の例文では実際にドラマーがステージ上を駆けまわってもいい限り漢字表記は不適切である。これらは表記によって表す意味が異なる語といえる。

4.1.3. 「嵌る／ハマる」

「嵌る／ハマる」という動詞に関しても表記による意味の違いがあると考えられる。以下に Web からの用例を示す。

- (5) a. 外資系ファンドの罠に**嵌る**な！！（個人ブログ「月間5%の利益を上げる！実況」）
- b. 今更**ハマる**アニメがどうしても最近多い件。（個人ブログ「めぐるめぐイボンヌの平行ワールド」）

(5a) の「嵌る」は行為の対象が罠や落とし穴など、主語（この場合は、ブログを読んでいる読者と推測される）が不利益を被るものであるのに対し、(5b) における「ハマる」の対象はアニメであり、それは主語が不利益を被るものではなく、好ましいもの、もしくは趣味を表すものである。これらの用例に関連した現象として「嵌る」では他動詞形「嵌める」を「不利益を被らせる」という意味で用いることができるのに対し、「ハマる」の他動詞形「ハマる」を「(アニメなどに) 没頭させる」という意味で用いて「*彼をアニメにハマる」という表現をすることは困難である。同様の意味を表現したい場合には「ハマらせ

る」にする必要がある。このことから表記による意味の違いが顕著であり、また共起する単語にも違いのある語の一例といえる¹⁴。

4.1.4. 「薬／クスリ」

「薬／クスリ」も表記による意味の違いが認められる事例である。Web からの用例を以下に示す。

- (6) 「薬」を「クスリ」とカナ書きすると危ない感じがする (〇×ソーシャル コトノハ)

(6) の「薬」は病気の治療に使われるもののことを指す意味を持っているのに対し、「クスリ」は法律で規制されている大麻や覚醒剤のことを特定の指していると考えられる。この用例は不特定多数の人間が色々なテーマについて〇×で答えていくというサイトからの引用で、(6) に示したものはそのテーマの一つである。結果としては、このテーマに対する解答は〇という意見の方が多かった。また、×とした人の中には×であるとした理由に「ヤク」という表現の方が危ないというものがあった。ここで注目すべきは「ヤク」という表現にもカタカナ表記が使われているという点である。(6) の事例は表記による意味の違いを認識している人の数が一般的にも少なくないことを示しているといえる。

また、「薬」は「くすり」という読みでは自由形態素であるが、「ヤク」という読みでは拘束形態素である¹⁵。そのため、カタカナ表記語の「ヤク」をそのままの意味で「薬」と漢字で表記することは困難である¹⁶。別の言い方をすると「ヤク」というカタカナ表記語はひとつの語彙として確立されているといえる。

4.1.5. 「携帯／ケータイ」

「携帯／ケータイ」の意味の違いについて、以下に Web によく見られる用例を3つ示す。

- (7) ケータイ小説 (携帯電話で読む小説) / お財布ケータイ (携帯電話に支払い機能が付いている物) / Android ケータイ (Android を搭載した携帯電話)

(7) は Web 上や携帯電話の広告でよく使用されている表記の事例である。漢字表記の「携帯」は「身につけて持っている・持ち歩く」という意味である。しかし、(7) のように「ケータイ」とカタカナ表記する場合は「携帯電話」のみを指す名詞であり「身につけて持っている・持ち歩く」という意味での使用は不可能である。例えば「ケータイサイト」という

表現は携帯電話に対応したサイトという意味であり、「身につけて持っているサイト・持ち歩くサイト」という解釈は困難である¹⁷。

4.1.6. 「先生／センセイ」

以下に示すのは、小説に見られるカタカナ表記語の用例である。

- (8) 俺は平素、多々良先生のことを尊敬と親しみを籠めて**センセイ**と呼び習わしている。文字で表記した場合には漢字にはなるまい。平仮名でもない。片仮名である。
(中略) 馬鹿にしている訳ではない。あくまで尊敬と親しみを籠めてそう呼ぶのである。そう。尊敬と親しみを籠めて。(京極夏彦「今昔続百鬼-雲」p.14)

この台詞では「先生」と「センセイ」をハッキリと分けて、カタカナ表記を「尊敬と親しみを籠めた」呼び方としている。実際には、あとの台詞からカタカナ表記の「センセイ」は「尊敬と親しみ」というよりも馬鹿にした表現であるように読み取れる。この用例は漢字表記語とカタカナ表記語の意味の違いを効果的に利用した表現であるといえる。

4.2. 若者言葉としてのカタカナ表記語

4.1節の事例に加えて、若者言葉には漢字表記を持つ語をカタカナ表記にする事例が多い。若者言葉におけるカタカナ表記語について、2節で取り上げた則松・堀尾(2006)は「若者特有の感覚・感性・感情などを表現しようとする」また「感覚・感性・感情・心情などの心的側面に顕現しやすい」(則松・堀尾 2006:30)という指摘をしている。本稿の観点からは「格好いい」「決める」などの漢字表記語に対する「カッコいい」「キメる」という若者向けの雑誌に積極的に使用されるカタカナ表記語は、4.1節で取り上げた事例と同様にカタカナ表記語が独自の意味を表す事例と考えられる。すなわち、若者言葉の事例はカタカナ表記によって単に音だけを表すものではなく、若者特有の感覚や語感という一種の属性が付与されたものであるといえる¹⁸。

4.3. 考察

以上4.1節および4.2節で取り上げた事例では、漢字表記語とカタカナ表記語のそれぞれが表す意味が異なる。ここで、カタカナ表記語を漢字表記語の単なる異表記や多義とすると、カタカナ表記語特有の意味とその傾向や生起環境の違いが説明できず、若者言葉特有の使用例や語感を捉えることも不可能である。また、漢字表記語との差別化を図る、とい

うだけでは、あえてカタカナを使用する動機付けとしては不十分である。この時、カタカナ表記語は仮名表記の「意味が希薄である」という性質と、カタカナ表記の「外国・冷たい・気取った・モダン・おしゃれ・鋭角的」というイメージに動機付けられた独自の意味を持つ語であるとするので、それぞれの語の使用の実態に即した説明ができる部分がある。

イメージの観点から 4.1 節で取り上げた語について記述すると「クスリ」はイメージとして挙げた要素のうち、特に「鋭角的」「冷たい」という要素に動機付けられ、それらの要素が意味に反映されたものであるといえる。このことから、カタカナ表記の「クスリ」が大麻や覚醒剤を特定の表すことが説明できる。「ケータイ」では、特に「モダン」という要素に動機付けられ、それが意味に反映されているということから新しい通信デバイスであることが説明できる。また「おしゃれ」という要素にも動機付けられているとすると、カタカナ表記が特に広告に見られることが説明できる。広告は商品に対する「おしゃれ」という要素を喚起させることで、購買意欲を煽るものと解釈できるからである。若者言葉についても同様に「モダン」「おしゃれ」という要素にもとづくものと考えられる。「ハシる」は「外国」という要素から西洋音楽に関連した語であることが捉えられ、「ハマる」では「モダン」という要素からアニメなどの新しいポップカルチャーに関連した語であることが説明できる。「センセイ」は「冷たい」「気取った」という要素の主観的な判断にもとづく「マイナス」という要素に動機付けられ、それが意味に反映されたものといえる。

このようにイメージの観点からそれぞれの語を捉えると、カタカナ表記語特有の意味とカタカナ表記使用の動機付けをうまく説明でき、多様なカタカナ表記語の分類にも有効であるといえる。

また、カタカナ表記語がカタカナ表記のイメージを積極的に利用した表現であり、単に音のみを表している表現や単なる異表記ではないことは上記の事例からも明らかである。別の言い方をすれば、カタカナ表記語はカタカナ表記のイメージとして挙げた要素を属性として持った語であり、漢字表記語の一種の同音異義語である。

さらに、表記について歴史的に見た場合、「据わる／座る」という同源で一つの音を持ちながら、意味によって表記が分かれているものがあることが注目される。過去においては、意味に差が生じて、それを表記に反映させる際に漢字表記が選択されていたものが、現在においてはカタカナ表記が選択される場合があることを、カタカナ表記語の事例は示しているのではないだろうか。ただし、その際にはカタカナ表記のイメージに基づく意味を付加することになるため、イメージに合致しないならば、カタカナ表記は用いられないと考えられる。例えば「工事」を「コウジ」と表記するのは不自然と考えられる。別の言い方をすると、カタカナ表記を使うことは新語を生産するための一定の制限付きの手法であるといえる。

5. まとめと展望・課題

5.1. まとめ

日本語は漢字、ひらがな、カタカナという3つの表記体系を持つ言語である。これは日本語では一つの音が漢字とひらがな・カタカナの3通りで表記される可能性を意味する。本稿ではこれらの表記に注目し、特に漢字表記とカタカナ表記で意味の異なる語を取り上げ、認知言語学のアプローチをもとに身体性とイメージの観点から考察した。考察にあたり、カタカナ表記のイメージを先行研究の記述とデザイン性の観点から具体化し、認知言語学におけるイメージと意味の関係を述べた。その際に認知言語学のアプローチを用いる利点についても説明した。

本稿の考察により、カタカナ表記のイメージと仮名表記の意味の希薄さがカタカナ表記語独自の意味を動機付けていると考えられることを主張した。そして、カタカナ表記語が単に音を表すだけのものや、漢字表記語の単なる多義や異表記ではなく、独自の意味を持つ一種の同音異義語であると考えることが妥当であると結論づけた。

本稿の意義は、言語の表記を視覚というヒトの身体性から認知的に捉え、カタカナ表記語の持つ独自の意味を表記のイメージとその性質から示し、イメージの観点から意味記述をする一つの方法を示したことである。また、カタカナで表記することが新語を生産する一つの手段である可能性を示し、言語の表記・字体における創造性の一端を示した。

5.2. 展望・課題

カタカナ表記語の使用は、ヒトの言語使用における慣習性と創造性の2つの側面が観察される事例といえる。本稿は認知的観点から創造性の側面に重点を置いたものであるが、その創造性から生まれたものが用法として定着するという点には触れていない。そのため、この先の展望として、流行の観点から現在のカタカナ表記語の定着を考察することが考えられる。本稿で示した認知的要因がカタカナ表記語の意味に作用しているとしても、用法として認められ、定着するにはまた別の要因が関わっていると考えられるからである。

現在、Web上の文章にはカタカナ表記語が多く見られると同時に、雑誌・小説・広告などの出版物にも多数の使用事例が見られる。今後の課題として、流行の観点から、いつごろ、どのような媒体からカタカナ表記語が現在の用法で使用されるに至ったのか、また現在のイメージを持つようになったのかを時代的な背景をもとに調査する必要があると考えられる。その際には、流行においては誰もが模倣者から発信者になれるというWebの特性がカタカナ表記語の定着に果たした役割をインターネット普及前と後の用例から探ることが考えられる。また、本稿でカタカナ表記のイメージとして挙げた要素が十分とは言い切

れないという課題も残されるため、その点に関しても調査を進めたい。

注

- 1 本文中に「仮名」と書くときにはひらがなとカタカナ両方を指し、「カタカナ」と書く場合にはカタカナのみを指す。
- 2 「子ども手当」の「子ども」や「檸檬」を「レモン」と書くもの。また「言う・謂う・云う」を「いう」と書くもの。
- 3 漢字で書くことができない語彙でも、読むことだけならできる場合は多い。このことと変換エンジン（ことえり、ATOK など日本語入力アプリケーションに実装される）の種類によっては語彙の意味を表示してくれるものもあることを合わせて考えると、漢字表記を幾つかの候補から選択することはかなり容易であると考えられる。
- 4 本稿ではカタカナ表記を取り上げるが、ひらがな表記もまた独自の意味を持つ可能性があると考えている。そのため、ここは「仮名」とした。
- 5 漢字の場合、木偏がついた「机」という表記が木に関連していることから、例えば「櫛（ケヤキ）」が初見であっても木に関連していると推論することは可能である。
- 6 これ以降、ある一つの音を持つ語の漢字表記を漢字表記語、仮名表記を仮名表記語、仮名表記語のうちカタカナ表記のものをカタカナ表記語と記述する。
- 7 また、イメージと言語の関係についての研究として、菊池（1993）は和語・漢語・外来語という語種とそれぞれのイメージの統計的調査をしている。菊池の研究はカタカナという表記のイメージについての研究ではないが、言語とイメージの関係を捉えたものである点は注目される。
- 8 例えば「故郷の情景をイメージする」すなわち「情景を心のなかに思い浮かべる」場合には視覚的記憶を頼りにしなければならない。
- 9 「イメージ」に関しては、さらに佐々木（2008）で身体性との関わりが述べられている。
- 10 これはいわゆるパラ言語的情報のことである。
- 11 一般的に漢字は「表意文字」とされることが多いが、「蚊」（ブン）のように音を表すものもあるため、厳密に言えば「表音文字」である。
- 12 漢字であっても、例えば「嵌」のように意味を「山」「欠」「甘」という漢字から推定することは不可能なものもある。
- 13 ビジュアルグラマーとは「ビジュアルデザインからの文法」であり、言語表現の視覚的側面に注目するものである。詳しくは岡本（2008）を参照のこと。
- 14 また「嵌る／ハマる／はまる」という動詞は「誰かに気に入られる」という意味で使用されることもあるようである。例えば「あの若手芸人は最近さんまさんに嵌／ハマ／はまっている」など。ここで表記を特定しない（できない）のはこのような表現が書き言葉ではなく、話し言葉で用いられるためである。
- 15 これは小川典子氏（京都大学大学院）の指摘による。
- 16 実際には広辞苑にヤク（薬）の項目に隠語として「一を打つ」という記載がある。しかしながら、この記載は広辞苑の「網羅的な記述」という性質からこの項目に便宜上挙げられていると解釈でき、漢字表記される用例を示すとはいえないと考えられる。
- 17 また、「ケータイ小説」の場合も「携帯電話で読む小説」という解釈であり、「持ち運ぶ（紙媒体の）小説」という解釈は困難である。
- 18 さらに「ハシる」を「走る」と表記することや「ケータイ」を「携帯」と表記することが文脈によっては意味の混乱を招く可能性もあり、表記を分けることには解釈コストの経済性も関わっているといえる。

参考文献

- 出口雅也. 2003. 「認知音韻・形態論とコネクショニズム」, 吉村公宏(編)『認知音韻・形態論』155-193. 東京:大修館書店.
- 岩原昭彦・八田武志. 2004. 「文字言語における感情的意味情報の伝達メカニズムについて」『認知科学』11: 271-281.
- 菊池悟. 1994. 「大学生の外来語意識(1) —イメージ・表記・語種意識の調査から—」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』4: 66-73.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- 成田徹男・榊原浩之. 2004. 「現代日本語の表記体系と表記戦略—カタカナの使い方の変化—」『名古屋市立大学人間文化研究』20: 41-55.
- 則松智子・堀尾香代子. 2006. 「若者雑誌における常用漢字のカタカナ表記化—意味分析の観点から—」『北九州市立大学文学部紀要』72: 19-32.
- 岡本能里子. 2008. 「日本語のビジュアル・グラマーを読み解く 新聞のスポーツ紙面のレイアウト分析を通して」岡本能里子・佐藤彰・竹野谷みゆき(編)『メディアとことば3』26-57. 東京:ひつじ書房.
- 佐々木正人. 2008. 『からだ: 認識の原点』東京: 東京大学出版会.
- 山田尚勇. 1991. 「文字論の科学的検討」『学術情報センター紀要』4: 261-318.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.
- 横山詔一. 2004. 「文字処理の認知科学」『月刊 言語』33 (8): 56-63.

辞書

- 『岩波国語辞典』第5版 東京: 岩波書店.
- 『広辞苑』第6版 東京: 岩波書店.
- goo 辞書 [<http://dictionary.goo.ne.jp>]
- weblio 辞書 [<http://www.weblio.jp>]

引用例出典

- (4a): 走ることは考えること [<http://blog.livedoor.jp/payuta/archives/51810680.html>]
- (4b): キャスフィ学生コミュニティ・ドラム掲示板
[<http://www.casphy.com/bbs/test/read.cgi/drum/1218834915/150>]

(5a)：月間 5 %の利益を上げる！実況

[<http://gekkan5per.seesaa.net/article/155602383.html>]

(5b)：めぐるめくイボンヌの平行ワールド

[<http://ameblo.jp/teamakb4848/entry-10659272650.html>]

(6)：〇×ソーシャル コトノハ [<http://kotonoha.cc/no/103935>]

(8)：京極夏彦. 2006. 『今昔続百鬼-雲』東京：講談社.